令和 8 年 10 月 23 日

種子島開発総合センターリニューアル基本構想・基本計画策定業務委託 公募型プロポーザル講評

種子島開発総合センターリニューアル基本構想・基本計画策定業務委託プロポーザル審査委員会

（講評）

本業務は、築 43 年経過した種子島開発総合センター（鉄砲館）のリニューアルに向けて、施設が目指す姿や、どのような機能・規模・配置とするかといった計画の大枠を定める「基本構想・基本計画」をつくるものである。その担い手を選ぶ公募型プロポーザルには、2 社から参加の申し込みがあった。参加資格確認を行ったうえで、10 月 2 日に一次審査を実施し、2 社ともに二次審査に進むこととなった。10 月 22 日の二次審査では、各提案者による 15 分間のプレゼンテーションの後、15 分間の質疑応答を行った。

審査委員会は、西之表市副市長（委員長）、西之表市教育委員会教育長、市財産監理課長、市建設課長、鹿児島大学大学院元教授、鹿児島大学准教授、熊毛支庁建設部建設課建築係技術主幹兼建築係長の 7 名で構成した。2 社のプレゼンテーションと質疑応答の終了後、各評価項目について意見を交わし、審査委員全員の合意のもとで採点を行なった。各評価項目では 2 社の間に大きな差はなかったものの、それぞれの項目で「B 社」が得点を重ね、合計点では差がつく結果となった。

契約候補者となった「B 社」の提案は、将来の世代に過大な負担を残さないよう、市の規模に見合った費用に配慮した適切な計画であった。工程は具体的かつ現実的に示されており、基本計画の着手前に基本構想・基本計画の素案を成果物として提出する段階が設けられている点も、市と協議を重ねながら計画を進めるうえで評価された。

また、提案者が 3 回にわたって島に滞在し、市民や関係者から直接話を聞く場やワークショップを開き、意見をまとめていく提案であり、その熱意、姿勢が高く評価された。対面で顔を合わせて行うワークショップでは、アンケート調査だけでは見えてこない声を拾い上げることが期待できる。さらに、市民がワークショップに参加することで、ともに施設をつくり上げていこうという機運にもつながるであろう。来館者に何度も足を運んでもらうための仕掛けを考えている点、またそうした取り組みの経験を有している点も評価された。

施設の計画面では、増築を前提としたゾーニングが明確に示されており、工事期間中の鉄砲館の営業継続の可能性についても配慮されていた。チーム構成と担当が明確で、同種施設の基本構想・基本計画の実績があり、同じ担当者による一貫した体制で業務にあたる点も、実現可能性が高いと判断した。

一方で、ゾーニング・増築計画については、他の案も含めてさらに検討する余地がある。収蔵・保存の方法についてもまだ検討を深める必要がある。駐車場の計画と、駐車場からのアクセス動線についても懸念が示された。ま

た、体制に種子島の地元の協力事務所が入っていないため、リサーチが表面的なものにならないかという懸念もあった。今後の業務においては、これらの点について市と十分に協議を重ね、検討を深めていただきたい。

次点となった「A 社」の提案は、収蔵・資料保存の観点から施設のあり方を検討しており、博物館機能の充実という本業務の目的に正面から応えようとするものであった。増築だけでなく既存部分の減築を踏まえ、あらゆる可能性を検討したうえで最適解を導こうとする姿勢や増築計画において駐車スペースに配慮したボリューム検討を行っている点、屋上を活用する点が評価された。

また、初期段階で集中的にヒアリングとワークショップを行う計画で、インタビューの内容まで具体的に検討されている点が評価された。一方で、インターネットや紙によるアンケート調査では市民の意見を汲み取るのに限界があるのではないかという懸念があった。さらに、提示された工程の現実性に疑問が示され、得点が伸びない結果となった。

なお、両社ともに、近接する多世代交流施設との連続性については十分に示されておらず、今後の検討を求めたい。

短い提案期間にもかかわらず、遠方から現地調査に来島いただいたうえでご提案いただき、再びプレゼンテーションのため来島された提案者の方々に、この場を借りて深く御礼申し上げる。種子島開発総合センター（鉄砲館）が、市民とともに次の時代にふさわしい博物館として生まれ変わり、多くの方々に繰り返し訪れていただける施設となることを祈念し、講評としたい。